

2022年8月1日

嶋尾稔

## 情報 2

麓新一『一九世紀後半における国際関係の変容と国境の形成』（山川出版社、2023年）が幕末維新期の鬱陵島開拓構想を北方（千島列島、樺太、ウラジオストック）の動向との関連で論じている。主な論点は以下のとおり。

- ・1854年のロシアとの国境交渉に関する幕府の議論において、樺太や千島列島を放棄する案が元禄期に鬱陵島を放棄した前例を踏まえて論評されている。

- ・同年、函館奉行がイギリス軍艦及びアメリカ船から得た情報としてクリミア戦争でロシアと対抗しアロー戦争で中国と戦っているイギリスが鬱陵島を領有したという風説を上申した。

- ・1858年に長州藩が、日本海域に進出する外国船に対抗するために鬱陵島を開拓する構想を立てた。実現はしていない。

- ・1875年に調査のために外務省からウラジオストックに派遣された瀬脇寿人が同年に長崎からウラジオストックへの航路上にある鬱陵島に関心を持ち情報収集を行った。ウラジオストック滞在中にロシアが朝鮮を狙っていることを認識し、1877年には鬱陵島を拠点に朝鮮と貿易を行うことでロシアと対抗することを提言している。その歴史的背景として1860年のロシアの沿海州獲得と1871年のウラジオストックの拠点化がある。

- ・瀬脇の勧めで1879年に長崎の士族が鬱陵島の開拓願を提出した。

結論部においてロシアへの危機感のなかで「日本の「竹島」（ウルルン島）への政策が展開していた」というまとめがなされているが、これは問題があろう。ここで挙げられた鬱陵島開拓構想は、長州藩、一官吏、民間人の発案に過ぎず実現もしていない。そのような国策が展開していたわけではないだろう。同書はなぜか竹島資料勉強会の研究成果を無視している。それを参照していれば、鬱陵島に対する明治政府の政策の展開がより正確に追えたはずである。

竹島資料勉強会の研究によれば、1877年に長崎県令が鬱陵島開拓について政府に問い合わせ、1881年には島根県令が鬱陵島の開拓願を出している。これらの情報を合わせれば、明治初期の鬱陵島への関心の高まりがより明らかにできたはずである。1883年に鬱陵島への渡航禁止が改めて全国に通達されていることが、同書では語られていない。これを抜いて明治政府の鬱陵島政策の展開を語ることは出来まい。同書の説を援用してこの出来事の位置づけを語るとすれば、ロシアへの危機感を契機として高まった鬱陵島開拓への関心を鎮静化するために政府は渡航禁止を明確化したということになるだろうか。

明治4年版の『増訂大日本國郡輿地路程全図』（長赤水原図、鈴木驥園増訂）を言語文化研究所で購入した。赤水図を基本にしつつ、蝦夷、千島、樺太が描かれている。位置や方角

は全く不正確である。樺太を描くために本来の赤水図の図郭からはみ出すように紙が継ぎ足されている。竹島・松島と北方が描かれた地図である。琉球処分や千島樺太交換条約以前の民間的な国土意識を示したものと言えよう。写真を末尾に掲げる。

この図は晩年の赤水の意志を継承して完成したものと言えるかもしれない。18世紀末のラクスマンの来航以後の北方調査（間宮林蔵、近藤重蔵）に先立ち、天命5年（1785）の蝦夷地調査の情報に基づき、赤水も蝦夷、千島、樺太の図を描いていた。その後大黒屋光太夫持参図を写してもいる（三浦邦明、2019、『赤水の「蝦夷之図」と「蝦夷松前図」の制作時期と時代背景』高萩：長久保赤水顕彰会）。

会沢正志斎が後期水戸学の代表作であり国体論の嚆矢である『新論』を著したことは周知のとおりであるが、そのきっかけとなったのは地元の漁民が異国船の乗員と普通に交流しているのを知ってショックを受けたことであったという（片山杜秀『尊王攘夷：水戸学の四百年』2021年、新潮社）。それは現在の天津町（北茨城市）の漁民であったが、赤水の故郷高萩のすぐ北にある。このあたりの漁民と外国人の交流はこれが最初ではない。18世紀後半に天津町と高萩の中間に位置する磯原の漁民がベトナムに漂流し、長崎に送還されている。これを長崎まで迎えに行ったのが長久保赤水である。18世紀後半段階において水戸の北にある高萩や磯原は決して国際情勢と無縁ではなかった。ラクスマンが来航した際、水戸学者立原翠軒は配下の木村謙次に蝦夷地の隠密調査を命じている（片山上掲書）。立原翠軒は赤水とは懇意である。高萩郷土史研究会編、2019、『現代語訳・続続長久保赤水書簡集』高萩：長久保赤水顕彰会には立原甚五郎（翠軒）にあてた手紙が31通収められている。



